

メール2《ゆあ》



予告メール

1

.....

4

2

.....

16

3

.....

29

4

.....

40

5

.....

52

6

.....

64

演出メール

1

.....

78

2

.....

88

3

.....

100

4

.....

113

5

.....

126

6

.....

144

7

.....

157

あとがき

.....

4

予告メー
ル

1

黒川ゆあは一人教室の片隅で本を読んでいた。

休み時間と言うこともあり、教室はかなり騒がしかったが、そんな喧噪など気にする様子もなく集中して本を読み進めている。ともすれば少し寂しそうに見えるが、別段仲間はずれにされているわけではなく今日は好んでこの立場を貫いていた。その理由はゆあの手に行っている本にある。待ちに待った恋愛小説の続編が昨日発売され、友達と会話する間を惜しんで読み進めているのだ。

物静かな風貌から本を読む姿がさまになっており、日常生活に支障はないが本を読む時にだけかけるメガネが文学少女の雰囲気醸し出している。少し伏し目がちに本を見下ろす瞳、恋愛が成就したのか少し緩んでいるふつくらとした唇、セミロングの黒髪は日本人形のように艶やかで本当に美しい。どちらかというとき愛らしい印象のあるゆあなのだが、差し込む日差しを浴びてまるで輝いているように見える姿は、美しいと言う表現がぴったりだった。

そんなゆあの姿を数人の男子生徒がぼんやりと見つめている。誰もが守ってあげたくなる儂さと持つて生まれた可愛らしい雰囲気は男女問わず人気を誇っていた。しかし、引っ込み思案の性格から大勢でいるのが苦手なため友達と呼べる生徒は少なかった。

小さな溜息を一つ漏らし、もう一度唇に笑みを浮かべて本を閉じる。集中して読んでいたのだろう、読むのが遅いゆあだったが一日からず読み終わってしまった。

——ふう……もう終わっちゃった。でもこういうお話好き。やっぱり恋愛小説はハッピーエンドで終わった方が嬉しくなっちゃうもん。

瞳を閉じ余韻に浸っているとところへ一人の女生徒が近づいてくる。クラスメイトの高橋葵だ。

「もう大丈夫だよ。あんまり集中して読んでるから声かけずらかったよ」

「あつ、ゴメンナサイ」

ゆあは慌ててメガネを外すと葵に振り返った。その態度が少しよそよしく見えるのは気のせいではない。話すのが嫌だと言うわけではないのだが、急に話しかけられると緊張してしまう。それを隠そうと必死になって笑顔を作るが、その笑顔が引きつっておりなんとも情けない表情になっていた。

「もう。いい加減慣れなよ、突然話しかけられて緊張するの。こっちがいけないことしてるような感じになるじゃない」

怒っているわけではないが少しからかってみる。まじめな性格なゆあは、言われたことを真剣にとらえてしまふ傾向があるので、面白い反応が返ってくることだろう。それを期待してか、葵はいたずらっ子のような笑みを浮かべていた。

「ゴ、ゴメンナサイ……でも嫌なんじゃないんだよ。どうしてもびっくりしちゃって……話しかけてくれることは嬉しいし……えっと……あれ……なんだっけ……」

予想通りの反応が返ってくる。葵は余りにも予想通りの反応に思わず声を上げて笑い出した。

「アハハ！ もう、ゆあつて可愛いんだから。冗談だよ冗談。そんな真剣に言い訳しなくていい。気にしてる訳じゃないから慌てないで」

その笑顔を見て葵がからかっていることを知ると白い綺麗な頬をほんのり赤く染め俯いてしまった。その仕草が可愛らしく女の葵ですらドキッとしてしまう。

「もう……そんな可愛い表情しないでくれる。襲いたくなっちゃうから」

「そんなにいいじゃないで……顔が赤くなっちゃう……」

「フフッ、もう赤いつて」

二人のやりとりを数人の男子生徒がうらやましそうに見つめていた。ゆあのことを遠くから見つめているという暗黙の了解が出来上がっているのか、男子生徒は単独でゆあに話しかけることはしない。

「それより話はなんなんですか？ 高橋さん」

「葵！ もう、いつになったら名前で呼んでくれるの。この間も約束したじゃない」

クラスの中で一番仲良くしている葵ですらこんな感じだ。そんな態度に葵はなんとかうち解けようと必死になっている様子だった。

「ゴメンナサイ。葵……ちゃん」

自分でもこんな性格が嫌になることがある。もつとラフに生きられればどんなに楽だろう。もつと性格を明るくさせなくてはいけないと常日頃思っているのに、なかなかそれが行動にうつせない。

「そうそう、それでよし。うーんとね、こないだ話したこと。今度も雑誌の撮影なんだけど、カメラマンがどうしてもゆあを使いたいって言ってるんだよね」

「そんな、わ、私なんかダメだよ。高……葵ちゃんの方が、カメラマンさんと仲良かったじゃない……だから葵ちゃんの方がいいと思うよ」

「ああ、あれ。一応あれでも私の兄貴なんだよね。だから私なんかもう撮りたくないんだってさ、がさつな私なんかより清楚なゆあの方がいいってうるさくて。だからお願い。後一回だけ手伝ってくれない」

「でも……」

数ヶ月前、半ば騙される形で雑誌の撮影に参加したことがあった。確かにあの時は楽しかったのだが、いざ撮影が始まってしまうと心臓が壊れてしまうのではないかと思うくらい緊張したのを覚えている。その時「私にはこの仕事はできないんだ」と思い知らされた。

「大丈夫だよ。私もついて行くし、今度は事務所を通さない仕事だからその場でギャラも出るから、小遣い稼ごとってさ。私もう兄貴に大丈夫だって言っちゃったんだよ。それに、とりあえずゆあと一緒になら私も撮影に参加させてくれるって言うし……友達誕生日とかあったから今月ピンチなの。お願いゆあ！ 私を助けて思っ」

頼まれて断れない性格を知っていて葵は手を合わせ頭を下げた。そんな葵の姿に、ゆあの顔がみるみる困った顔になっていく。

「わ、わかったから、そんなことしないで……でも、今回だけだよ。私、本当に緊張しちゃってダメなんだからね」

「ありがとう。それで撮影は今日の夕方だからよろしくね」

「きよ、今日なの！ どうしよう……私……あの……その……」

そのうろたえようがまた可愛らしいが、慌てすぎてなにを言っているのかわからない。

「かえって何日も先じゃない方がいいでしょ。緊張するのは今日だけでいいんだからさ。じゃあ、放課後よろしくねえ」

強引に用件を伝えると葵は自分の席に戻ってしまった。なんとも自分勝手な葵だが、そんなサバサバした性格をゆあはいつもうらやましく見つめていた。

葵の後ろ姿を見ているとチャイムが鳴り、しばらくして教師が入ってくる。確かに言われてみれば葵の言葉は的を射ているかもしれない。これで撮影が一週間先と言われたら、緊張で胃に穴が開いてしまうかも知れない。しかし、葵も大胆なことをする。撮影当日にもかかわらず、ゆあの返事も待たずにOKを出してしまうとは……

「自分にもその大胆さが少しでもあれば」とゆあは思う。そうすればもっと楽しい学生生活が送れるだろうに。

そんなことを考えているうちに授業が始まった。しかし、授業など全く頭に入ってこないどころか緊張は時間が経つ程に高まっていき、昼食すら喉を通らない始末だった。こんなことならギリギリまで知らなかった方が良かったと思いながら、ゆあは残りの授業を嫌な汗をかきながら受け続けるのだった。

「あ、葵ちゃん……やっぱりダメ……私、この格好じゃ出て行けない……」

スタジオについて衣装を身につけたゆあは、控え室から出てこれなくなっていた。別段水着だとか下着姿と言うわけではない。今日の撮影は『ティーンの普段着』を題材に行われている。しかし、普段では絶対に着ないであろう薄いピンクのタンクトップにミニのプリーツスカートを着せられ、顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。

「なに言ってるの、似合ってるよ。すごく可愛いじゃない」

「そうだよ。私ももつと若ければこんな格好したかったのに。それにゆあちゃんは肌がすごく綺麗だから、このくらい肌の露出があった方が男子の目を引くよ」

スタイリストの葛葉香も絶賛してくれている。その他の女性スタッフもゆあの可愛らしい格好をため息混じりで見つめていた。

「で、でも……こんな格好恥ずかしい……男の人の前になんて出れませんよ……」

最近の女の子にしては珍しく羞恥心の強い女の子だ。そんなゆあの姿を本当であれば、うざったいと思う業界人であったが、これもゆあの性格と醸し出す雰囲気のせいなのだろう、そんなことを思っているスタッフは一人もおらず、なんとかこの可愛らしい姿をカメラに納めたいと思っっているようだった。

「大丈夫よ。ここは女性スタッフの多い現場だから、なんなら男は全部追い出してあげようか？」 高橋君はカ

メラマンだからしょうがないけど、そうする？」

香が気を遣ってくれる。その言葉に甘えなくなるが、これは仕事なのだからわがままなど許されるわけがない。みんな誇りを持って仕事をしているのだから「失礼なことだ」とゆあは自分に言い聞かせた。

「ゴメンナサイ……そんな迷惑掛けられませんから……で、でも、もうちょっと待ってください……」

大きく深呼吸を何度も繰り返し、必死で落ち着かせようとする。その姿は少し滑稽でもあったが、笑う者は一人もおらず黙ってその作業を見つめていた。

「も、もう……大丈夫です。あ、葵ちゃん……」

その引きつった顔を見ると全く大丈夫には見えなかったが、ここで足踏みしていても始まらない。むしろ早く行って早く終わらせれば、この苦しみから逃れられる。そう必死に言い聞かせ緊張を和らげるため葵の手を握った。

「大丈夫！ 私も一緒だから」

汗ばんだ手と緊張の震えが葵の手に伝わってくる。そんなゆあを葵は愛おしく思っていた。

「う、うん……」

意を決して控え室を出てスタジオに向かう。

——ああ、ダメ……どうしよう。こんなのやっぱり無理だよ……

なんだか泣き出してしまいたくなるのをグッとこらえてスタジオの扉を開けた。

中に入るとそこは光に溢れる空間が存在していた。そこで撮影が行われると思うとますます緊張して逃げ出したくなる。

「おおーやっと来たな。うーん、やっぱりゆあちゃんは可愛いねえ」

最初に近づいてきたメラマンの高橋がゆあ達に声をかけ、二人を頭のとっぺんから足先まで見回した。い

つもの雰囲気と違う衣装に、うつすら化粧を施したゆあの出で立ちに高橋は満足しているようだ。

「うん、OKだな。それにしても葵は……」

「なによ！」

「ブツサイクだな」

葵も十分可愛らしいのだが、兄妹の会話とはこんなものだろう。

「失礼しちゃうわね。こんなミニスカート履かせて、本当は色っぽい私の太股が見たかったんじゃないのぉ」

「そんなもん見たら目が腐るわ！」

二人の何気ない会話がゆあと現場の雰囲気とを和ませる。そして、その流れのまま撮影へ突入していった。高橋兄妹はゆあが緊張しているのを知ってわざとあのような会話で和ませてくれたのかもしれない。

それでもいざ撮影に入ると緊張で体が堅くなったが、葵と高橋のリードもあり撮影は大したトラブルもなく予定時間を30分程オーバーして終了した。

控え室で衣装とメイクを落とし、制服に着替え終えたところでゆあはやつとホッと胸をなで下ろすことができた。

緊張のあまり撮影でなにをしたのかも殆ど覚えていない。何度か衣装チェンジしたが、一番最初のが大胆だったおかげで、残りの左程抵抗もなく着ることができたのだけ覚えている。

「ふうう」

イスに腰掛け、深い溜め息をついた時、香が入ってきた。

「ゆあちゃんお疲れ様。高橋君喜んでたわよ、この分だとまたお声がかかるかもしれないわね」

高橋が撮影中終始ご機嫌だったのは緊張しながらも覚えているが、こんなに恥ずかしい思いをするのはもうこりごりだ。

「いえ、もうこれが最後です……私、こういうお仕事は向いてないんですね。葵ちゃんみたいに自然に笑顔なんてできないし……きつと引きつった顔しかしてませんよ……」

「そんなことないわ。ゆあちゃん素敵な笑顔してたわよ。これで止めちゃうなんてもったいないと思うなあ」
「でも私……」

「可愛いと言われて嬉しくないわけがない。しかし、それを差し引いても緊張に耐えられるだけの勇気がなかった。

「あつ、ゴメンナサイね。こんな可愛い子がもったいないなあって思っただけだから、無理強いするつもりじゃないのよ。でも、もし興味が出てきたらいつでも電話してきなさい。ゆあちゃんだったらいつでもOKだから。それよりも本当にタクシーで帰らなくていいの？」

「はい、まだ電車もありますし、一人でタクシーなんて乗ったことないからちよつと怖くて、だから電車で帰ります」

「そう、それじゃコレ。今日のギャラね。一応タクシーチケットも入れといたから使うなら使って。あと、葵ちゃんは高橋君と一緒に帰るって言ってたから、まだスタジオにいるわ。あつちはもう少し時間がかかりそうだしね」

「わかりました。それじゃお疲れ様でした。葵ちゃんによろしく言っておいてください」

「わかったわ、お疲れ様」

ゆあは深々と頭を下げスタジオを出た。時間を確認すると11時を過ぎている。行きはスタッフが車で迎えに来てくれたので、いったいどこに連れてこられたのかわからなかったが、香に言われたとおりの道をたどっていくとやっとゆあでも知っている道に出ることができた。スタジオは歌舞伎町を抜けたところにあつたらしい。歌舞伎町は11時を過ぎているというのに人であふれかえっていた。その人の多さに驚いたのと昼間とは違

う煌びやかな大人の雰囲気、ゆあは足早に歌舞伎町を抜け新宿駅へと向かった。途中何人かの男に声を掛けられたが話など聞かずに逃げるように立ち去り、やつのことで駅のホームにたどり着いた時にはうっすらと汗をかいていた。

「はあ……こんな時間まで新宿にいたのなんて初めて……なんだか少し不良になったみたい」

初めての経験に薄く微笑んだ時、携帯電話が鳴った。着信音からそれがメールだとわかり携帯を開いてみる。

——葵ちゃんかな……

しかし、それは見知らぬアドレスからのメールだった。また悪戯メールかと思ってすぐに削除しようかと思ったが、そのタイトルを読んだ時、削除しようとしていた指が止まった。タイトルには〈予告メール〉とかかれていたのである。

——何これ？ なんの予告してるんだろ、映画の予告なのかな……あつ、もしかしたらこの間登録した映画のサイトからのメールかも……

〈予告〉と言われすぐに思いついたのが「映画の予告編」。よく映画も観に行くゆあは、ついこの間映画情報サイトに登録をしたばかりだった。そんなことを考えながらメールを読んでいくとその内容に驚いてしまう。それはゆあの考えていたメールとは全く違うことが書かれていたのだった。

『初めての痴漢に戸惑う少女』

少女は生まれて初めて痴漢にあった。恐怖のあまり声も出すこともできず痴漢に弄ばれてしまう少女……逃げのように降りた少女に、あろうことか痴漢は「ありがとう」の言葉を投げかけるのだった

——何これ？ 確かに予告編みたいな文章だけど……本当に映画の予告編なのかなあ……そんな分けないよ

ね。こんなエッチ映画みたいなの送ってくるはずないもん。

一体どこから送られてきたメールなのだろうか。しかし内容からして悪戯メールであることは間違いなさそう。そう思いなんの躊躇もなく削除する。

——こんな内容の悪戯メールなんて来たの初めて。もう、やんなっちゃうな。悪戯だつてわかってても気になっちゃうよ。うん、コレは気をつけて帰るようになってことだね。なんだか電車も混んでそうだから本当に気をつけよう。

後ろを見るとゆあの後には大勢の人が電車を待っていた。中には酔っぱらっている人も多く見受けられるので、本当に痴漢に遭わないように気をつけたほうが良さそう。

程なくして電車がホームに入ってくる。中は意外と空いていたが、この人数が乗れば満杯になってしまったろう。扉が開かれると後ろの乗客に押され車内へ入ったが、少し出遅れてしまい座ることができなかった。できれば座っていた方が痴漢に会わなくて済むと思ったのだが、それは仕方がない。しょうがなくゆあは逆側の扉の前に立って後ろを見ているが、まだかなりの人がホームに残っている。これでは朝のラッシュアワーと同じになってしまいそうだ。案の定、ゆあは扉に押しつけられ動けなくなってしまう。

——うーん。すごい……遅くてもこんなに混むんだ。潰されちゃう……

無理矢理扉を閉め、ゆっくりと電車が動き出す。そして、潰されそうになるのを必死で耐えながら2、3駅が過ぎるとほんの少しだけ余裕ができた。

——ふう、少しだけ空いた。

と一息入れた時、ある異変に気がついた。お尻にちよつとした違和感を感じたのである。

——えっ？ 何……こ、これってもしかして……痴漢……

まさかメールの通りになるとは思っていなかった。確かにこれだけ混んでいるのだから単なる偶然かもしれない。

ないが、今まで痴漢に遭ったことがないので、びっくりして声を出すこともできない。

——ど、どうしよう……声なんて出せない……

遭う前は、こんなことをされたら絶対に声を出してやろうと考えていたが、いざとなると喉を押さえつけられたように全く声た出てこない。

手は黙っていることをいいことにどんどん大胆になっていく、はじめはただお尻に手を当てているだけだったのに、徐々に指先から動かされ、今は完全に揉んでいる。ゆあは恐怖のあまり声を出すどころか牀まで動かなくなり小さく震えていた。

——止めて……お願い。どうしたらいいの……

後ろを振り向くことができれば声を出さなくても止めてくれるかもしれないが、そんなことできるはずもない。ましてや手で払うなど考えられなかった。

手はスカートをたぐり寄せるようにゆっくりと捲っていく、こんな状況にあるのに周りの人は気が付かないのだろうか、あるいは気が付いていながら知らぬ顔をしているのかもしれない。程なくしてスカートは完全に捲られてしまう。そして痴漢は遠慮なくスカートの捲られたお尻を堪能し始めるのだった。

——あっ……やだ……そんなことしないで……お願い止めて……

そんなことを思っても痴漢が止めるはずはない。そして痴漢は次の行動へと移った。

「ひっ……」

思わず声が出てしまう。手がパンティーをずり下げたのだ。驚きのあまり顔を上げた時窓に映る痴漢の顔が見て取れた。その顔を見ても「止めて」の一言はでない。むしろ恐怖が増しただけだった。

男は20代後半の男でじつとゆあのことを窓越しに見つめている。とても痴漢などするようには見えないホッソリとしたなかなかの男だったが、その視線は刺すように鋭く、なんにも言えないゆあを見つめ、あろうことか

微笑みまで浮かべていた。

——わ、私を見てる……怖い……そんな目で見ないで……

もう蛇ににらまれた蛙状態、恐怖のあまり軀を動かすこともできない。

男はもう片方の手で抱き寄せるようにしてゆあの小振りの胸を揉んできた。

「！！！」

初めて他人に胸を揉まれた。自分でも性の対象にして胸を揉んだことなど一度もないのに、男の手は大きく回すように胸を弄んでいる。お尻に回っていた手が腰に移り、とうとう前に移動してきた。手は何度かお腹を撫でてから徐々に下へと移動を開始する。

——止めて……そっちは……

いくら性に奥手だからと言って、なにをされるのかわかる。このままでは股間に手が回るのも時間の問題だろう。しかし、ゆあが小柄なことで痴漢の背が高いことが幸いした。無理に手を伸ばせば、男は覆い被さるようになくはならない。いくらなんでもそんなことをしたら周りに気付かれてしまう。男は無理に股間へは手を伸ばさずに両手で胸を揉み始め、腰に大きくなった男根を押しつけてきた。

——嫌だ……なにか当たってる……凄く堅い……押しつけないで……

恥ずかしさで顔が真っ赤になっているのがわかる。胸の愛撫も強くなっていくが、驚きのあまり快楽は感じない。しかし、意識をしていなくても軀は微妙に反応し、うっすらとパンティーにシミを作っていく。

そうして十数駅の間、ゆあは男に胸を弄ばれ続けた。周りはどうでもいいていくのに、誰もゆあを助けてくれる人はおらず、ゆあと視線が合っても皆素知らぬ顔で電車を降りていってしまう。そして自分が降りる駅に着いた時。ゆあは持てる勇気を振り絞って足を一步踏み出した。すると以外とすんなり男は呪縛を説いてくれた。飛び出すようにして電車を降り、涙混じりの顔で振り向くと男はニヤリと笑って、唇を「ありがとう」と

動かしたのだった。ゆあはその屈辱にその場を動くことができないでいる。ドアが閉まり電車が動き出しても立ちつくしたまま電車を見つめ続けていた。12時近くのホームには、左程人もおらず、ましてやゆあを気にする人など一人もいなかった。

その場に座り込んでしまいたくなる程力の抜けた軀をかううじて支えてベンチまで歩いていく。そしてベンチに腰掛けた時携帯電話が鳴った。携帯を未だ震える手で取るとそこには、〈予告メール〉が再び届いていたのだった。

その時やっとメールのことを思い出した。ゆあは慌ててメールを開いてみると〈今回はいかがだったでしょうか、次回の予告を楽しみにして下さい〉と書かれていた。

「何これ……もう嫌……」

ゆあは直ぐにメールを削除した。こんなメールなど見たくない。しかし、削除をしてもメールは何事もなかったようにフォルダの中に存在していた。しかも、その前に来たメールまでフォルダの中に残っている。

「えっ……どうして……そんな……嫌、消えて……」

何度も何度も削除を繰り返してみたがメールは消すことができない。

「どうして消えないの……」

十数回繰り返し返したところでやっと諦めたのか、ゆあは消すことのできなかったメールを呆然と見つめていた。この時、ゆあは逃れられぬ運命に捕まってしまったことをまだ知らずにいるのだった。